

日本近海産 *Cilunculus* 属ウミグモについて

中村光一郎(都東大和高), C. A. Child (NMNH)

On the pycnogonids of genus *Cilunculus* from Japanese water

KOICHIRO NAKAMURA, C. ALLAN CHILD

ウミグモ綱イソウミグモ科の *Cilunculus* ツノウミグモ属は形態上は *Ammothea* 属に似ているが、鋏肢の基部をおおう庇のような突起があるのが特徴である。今迄に北極海を除く世界各地から16種が報告されているが、南半球の深海から採集されたものが多い。北太平洋からは、*A. armatus* が九州、本州南岸、北海道よりオホーツク海にかけて採集された記録があるだけである。今回、演者の一人中村は相模湾より同属に属する未報告の2種を発見した。いずれも体長は約2mmの小型種で従来報告されているツノウミグモ種より小さく歩行肢も細い。さらに背部中央突起や体前端背面の突起がないこと、吻の形、眼点の有無、雄の腿節のセメント腺の形態と位置、歩行肢各節の長さの比、主爪と副爪の比などが従来種と異なる。また、この2種間でも接脚突起の間隔や太さ、胴部の長さが異なり、今迄に報告された種に該当しないので新種であろうと思われる。

日本産ホヤ類 *Ciona* 属2種の学名について

星野善一郎(岩手大・教育・生物), 西川輝昭(名古屋大・教養・生物)

A taxonomic revision of two ascidian species of the genus *Ciona* from Japan

ZEN-ICHIRO HOSHINO, TERUAKI NISHIKAWA

Hoshino・Tokioka (1967) は、従来わが国でユウレイボヤ "*Ciona intestinalis* (Linne)" とよばれてきたホヤが、形態的に明瞭に区別できる2種を含むことを明らかにし、仮に一方を *intestinalis*, 他方を新種 *robusta* とした。我々はこれらの学名を確定するため、文献調査と各地各年代産標本多数の観察を行った。その結果、前者は神戸沖で Challenger 号が採集し Herdman (1882) が命名した *savignyi* と同一であることが、模式標本の検討から判明した。また Linne の定義した *intestinalis* の模式産地ヨーロッパにこれまで生息してきたのは、*robusta* と形態的には今のところ識別不能の1種のみである可能性が極めて高いことも判った。この種が本来の *intestinalis* であろう。なお本種の日本産とナポリ産標本との間には、卵形態および生理機能における差が示唆されているが、その分類学的意義の解明は今後に残されている。

石川県産サンショウウオ一種の分類学的位置について

松井正文(京大・教養・生物), 宮崎光二(石川県教委)

On the taxonomic status of a salamander from Ishikawa Prefecture

MASAFUMI MATSUI, KOJI MIYAZAKI

1971年に竹田俊雄氏によって石川県羽咋市で発見されたサンショウウオは、透明・ひも状の卵のうを産み出す点で、同所的に分布するクロサンショウウオとは異なったトウホクアベサンショウウオ系の種と考えられ、雄の二次性徴などの特徴から、アベサンショウウオと同定された(宮崎 1977, 1978)。しかし、その後十分な数のアベ、トウホクと比較したところ、石川県産は両者の中間的な形態的特徴を示し、アベよりはトウホクに類縁の近いことがうかがえた。しかし、石川産はトウホク、アベの両者と卵のう外被に明瞭な縦条を欠く点で明らかに異なるばかりでなく、血清総蛋白、LDH、MDH の電気泳動パターンでも両者と異なる。これらの差異は、現状の分類体系に基づいて区別されるサンショウウオ類の“種間”の相違と同じレベルとみなせることから、石川産サンショウウオは、トウホク・アベに近縁な独立種として記載される予定である。